

## 風の腕

黄金の稲田を「陣の風が吹き渡り、波を打った様にサラサラと稲穂がゆれる。穂波と呼ばれるもので、見えざる空気の流れが風の息として見える一瞬である。青空にハケで掃いたような絹雲の白い筋に上空の季節の移ろいが見られ、野分けの風に激しい秋の勢いを感じ、木枯らしに舞狂う落ち葉に彩られた秋の風が見え隠れする。

秋の深まりとともに風がより身近に見える季節となってくる。

### 風の腕

紙切れの下から

あ、持ち上げたよ』

日本航空のウインスのエッセイ、風紀行に書かれた早坂暁氏の『風とHAIKU』の中の一節である。カナダの小学六年生の造った三行の詩、HAIKU（俳句）の訳である。そっと持ち上げられた紙に見えざる風の腕を見てとる素朴な感覚が素晴らしい。

日々、見えない空気を相手に温度や風を観測して天気図に具象化し、空を見上げては天気予報をして生活の業とする予報官諸氏もこの新鮮な感覚には脱帽するであろう。次々と襲来するあの巨大な台風ですら上空の風まかせて動く。もし宇宙から雲の渦を見ていたならば、不思議

にも見えざる風の腕でグイと向きを変えられているように見えるだろう。

か細い腕でかすかに揺すられている木の枝もあれば、丸太棒のような筋肉隆々の腕で野分けの風を見せてくれるものもある。天気予報を預かる予報官諸氏も見えざる風の腕を相手に悩まされながらも、風を通して組立てられた予想に腕の冴えを見せてくれるのではなかろうか。明日は十五夜、満月を横切る雲に、どんな秋風の腕が見えるだろうか。